

J-F・リオタール『マルローと署名せし者』

畑, 亜弥子

<https://doi.org/10.15017/9997>

出版情報 : Stella. 17, pp.233-236, 1998-06-25. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン : published
権利関係 :



J-F・リオタール『マルローと署名せし者』

畑 亜弥子

1996年マルローはシラク大統領の意向でパンテオン入りし、またアグレガシオンの課題にえられるなど、フランスでは没後20年の節目の年にふさわしい迎えられ方をした。こうした状況のもと彼にかんする研究書も数多く上梓されたが、なかでも本書は『ポストモダンの条件』などですでに著名な哲学者リオタールがマルロー伝を書いたということで大きな話題を呼んだ¹⁾。伝記というジャンルにかんじていえば、近年マルローだけではなく他の作家の伝記の出版もあいついでおり、伝記ブームとも呼べる状況である。周知のように、60年代・70年代にはヌーベル・クリティックがそれまでの伝統的なアカデミズムの実証的文学研究に対抗し、研究対象である文学作品をテキストと呼び、これ自体の自律性を主張していたので、文学作品を多かれ少なかれ作家の実人生と結びつけようとする伝記は拒否される傾向にあった。こうした文学研究の大きな流れにおいて近年の伝記ブームは、ヌーベル・クリティック的理念の限界に起因した、伝統的文学研究への安易な回帰現象というよりも、むしろ過去の伝記にたいして何らかの差異を含んだ注目すべき動きであることはだれしもが認めるところだろう。

リオタールも伝記というジャンルにたいして明確な意識をもっており、「マガジヌ・リテレル」誌のインタビューにおいて、本書を作家の人生のなかに作品の根拠を探し求めようとする一般の「biographie」と区別すべく「hypobiographie」と呼びたいと述べている²⁾。この造語は、一方ではマルローの生涯全体を意識の深層レベルまで掘り下げて考察しているという点で「深層の伝記」と訳せるが、他方ではそのような通常意識されないレベルを語ることは主観の混入を免れえず客観性に欠けるという点で「仮定的伝記」とも訳せるだろう。このように「hypobiographie」は旧来の伝記に対抗するという斬新な定義でありながら結局は一個人の見解という印象から抜け出せない

いうパラドクスをもつ。それは、意識下レベルといった領域ではいかにすぐれた考察であっても明確な事実性を打ち出せないからであり、必然的にリオタールの企みはかなりむつかしく危ういものとなろう。しかしながら本書をなおざりにできないのは、付記の「lectures」からわかるようにマルローにかんする重要な研究書や近親者の証言書そして公刊されていないものも含めた著作など多くの実証的資料をもちいたリオタールの仕事の手堅さによる。本書は17章立てで年代順にマルローの人生を追っているので構成の点では従来の伝記と変わりが無い。全体をとおしてリオタールの「hypobiographique」なマルロー像がちりばめられているといった体裁であるので、いくつかの注目される点について少し詳しく見ていくことにしよう。

まず本書においてはマルローの幼年期を精密に読解し、これを人生全体に適用している点がとりわけ大きな特徴である（しかし「深層の伝記」という呼称が想起させるような厳密な精神分析的手法によるものではない）。「ベルト、あるいは蜘蛛」と題された第1章は、マルロー1歳のときに生後3か月で死亡した弟フェルナンドの埋葬の場面ではじまり、このとき悲しみの淵にあった母ベルトが感じとったこと——自分がいずれは死にゆく人間という存在を生まれせしめる女性である——から、側にいたマルローは「死と再生」というテーマを受けとったと推測されている。マルローの小説では一般に「死」が最大のテーマとされていることや、芸術論においては「死と再生」こそがマルローが最も固執したテーマであったことを考えれば、この推測にはうなずけるところがある。つまるところ言葉も知らない時の出来事を象徴的事件として伝記にとり入れてしまう点が本書の特色をよくあらわしており、あとにつづく記述ではあたかもこれが事実のように引きつがれているのである。

またリオタールは、マルローの幼少年期における母性との関わりについても鋭い考察をおこなっている。両親が早くから別居状態になりやがて離婚したので少年時代の大半は母方の祖母の家で暮らすことになるが、祖母アドリエンス、未婚の叔母ヴァレンティーヌ、母ベルトという母権の家族構成のなかで窒息するような日々をおくっていた。すべてをあたたく包み込む母性の正の力よりもむしろ恐ろしい勢いで存在自体をのみ込んでしまうような負の力を体験したマルローは、そののち幼年期にたいして好ましい眼をむけることがなかったのは周知のとおりである。このとき逃げ場となったのは読書や美術鑑賞であ

り、青年期にさしかかる十代の終わりにはすでに相当の知識と思考力が備わっていた。そういった経緯ののちにキュビズムの活動を知ることになる。

この時期におけるマルローとキュビズムとの関わりは第4章「キュビズム」でとり上げられているが、リオタルはとりわけマックス・ジャコブとピエール・ルヴェルディの影響を重視する。マルローはキュビズムの活動が道化に終わってしまうことに違和感を覚え、結局はこの流派から離れていくが、本質的な意味での手法——現実の模倣より現実的な幻想を解放する異化作用——は徹底して残り、「現実の外」を解放する省略法・行為が生み出された、そうリオタルは読みとくのである。またペン・カメラをもちいた芸術手法の効果を演説・行動のなかにまで広げた領域でも見だし、マルローが生涯において終始キュビストであったというような大胆な定義がなされている。

そしてインドシナへの遺跡探検の体験をもとに書かれた『王道』は、一方では女性からまた芸術創造からも感じとられた「死と再生」のテーマを抱えキュビズムの手法を身につけたマルローが自分の欲望の明証を探しに行き、虫にまみれた聖なる彫像にであう（またもや両義性にであう）という興味深い事実を提示する作品として読みとかれる。また他方では輪廻転生に象徴されるような「死と再生」を穏やかに享受する東方世界との出会いという貴重な体験が示されているとも解釈するのである。

限られた紙幅ではすべてをとりあげることはできないが、これまで見てきたようにリオタルはマルローの人生の各局面について独創的な解釈を提示する。いずれも哲学者としての手腕が光っており、キュビズムについて深いレベルまで考察されうるのも美学にかんしてすぐれた著作があるリオタルならではだ。また幼年期についていくぶん精神分析的な解釈はすでにリオタルの『インファンス読解』³⁾にその原型がみられる。締めくくりとしてこれについて述べておこう。『インファンス読解』では真正なエクリチュールをおこなう者がつねに回帰する原光景の場というのを想定しこれを象徴的にインファンスと呼び（自身のカオスのなかから言葉をつむぎだしていくこの作業の困難さはまるで言葉を知らない子どものようだから）、6人の作家・思想家をそれぞれ別個にとり扱った小論文集であった。これにたいしマルローにおいてはそのような象徴としてのインファンスと実人生におけるそれとが重なると考えられ、より総括的な伝記という形式になっているのである。つまり象徴的インファン

スに体験される「死と再生」はまさに実際の幼年期に抱いた主題であったということだ。こうした意味で本書はリオタールにとって『インファン্স読解』の延長線上にあるといえよう。

はじめにリオタールが伝記というジャンルをかなり意識していることを述べたが、いっぽうマルロー自身もいわゆる従来の伝記を疑問視していた。「どのような伝記もそれが扱う作家に負う統一性をまぬがれず、またそれをまぬがれようとする伝記も存在しない。もし伝記が伝統的なパースペクティヴを失うとすればそれはその伝記がキュビズムを模倣する時だけであり、虚構の人物たちによる一見して虚構であることの明らかな主張を提示するときだけである」⁴⁾。これをふまえれば、本書は省略法で書かれあたかもこれに答えるかのような虚構空間が成立している点で、マルローが期待した来るべき伝記という位置づけも可能であるだろう。

以上のように本書執筆の意図はかなり野心的なものだが、同時に豊富な実証的資料にもとづく独創的な見解にはそれなりの説得力があり、今後のマルロー研究に多くの示唆を与えることになるだろう。

註

- 1) Jean-François LYOTARD, *Signé Malraux*, Paris: Grasset, 1996, 360 pp.
- 2) Jean-François LYOTARD, «La vie de Malraux doit être lue comme un recueil de légendes» (Propos recueillis par Philippe BONNEFIS), *Magazine littéraire*, n° 347, octobre 1996, pp. 26-30.
- 3) Jean-François LYOTARD, *Lectures d'enfance*, Paris: Galilée, 1991. 邦訳『インファン্স読解』(小林康夫・竹森佳史・根本美作子・高木繁光・竹内考宏訳), 未来社, 1996年。
- 4) *Malraux. Être et Dire*, Paris: Plon, 1976, p. 301. なお訳出にあたっては岩崎力訳「空想の図書館」, 『海』第9号, 1977年2月, 234頁を参照した。